

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ギリシャ語における空間詞と文法化・格推移
Author(s)	橘, 孝司
Citation	ニダバ, 25 : 67 - 74
Issue Date	1996-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047989
Right	
Relation	



ギリシャ語における空間詞と 文法化・格推移*

橘 孝 司

0. はじめに

筆者は橘(1995)及びTachibana(1994)において、中世民衆ギリシャ語(12世紀~15世紀)の空間表現に見られる統語構造上の特異性を取り上げ、特に文献学的側面からこれを論じた。本稿は同じテーマを一般言語学的側面から考察するものである。

問題となるのは次のような現象である。

(1) *ἔπεσεν ἐπάνωθεν το κάστρο* K.354.30-1²⁾

「城の上へと突撃した」

(1)に含まれる空間表現*ἐπάνωθεν το κάστρο*の構造は、この例だけから判断すると、前置詞+対格名詞のように思われる。しかし、*ἐπάνωθεν*は、副詞*άνω*「上へ」が接頭辞*επι-*と接尾辞*-θεν*によって拡張されたものであり、古代ギリシャ語では副詞として機能する²⁾。そうすると、(1)の空間表現の統語構造は副詞+対格名詞と解釈される。

本稿の目的はこの現象の特異性を以下の二点から明らかにすることにある。

A: (1)に見られるような中世民衆ギリシャ語の空間表現のカテゴリー及び統語構造はどのように分析されるべきか。

B: Aの結果は一般言語学的にどのように解釈されるのか。

以下、本稿では空間表現に含まれる副詞ないし前置詞をまとめて空間詞(Spatial Gram)と呼ぶことにする³⁾。品詞カテゴリーの認定に先立って問題の形態を副詞ないし前置詞と呼ぶことで生じるかも知れない誤解を避けるためである。

1. 空間詞のカテゴリー分析

1.1. 品詞カテゴリーの認定基準

まず最初に、問題の空間表現中に現れる空間詞の品詞カテゴリーの認定から考察していこう。この種の問題に関しては、それぞれのカテゴリーの定義から始めなければ議論が安定しない。そこで、二つのカテゴリーがどのように定義されるのか、という点を見てみよう。

古代ギリシャ語(古典ギリシャ語/コイネー・ギリシャ語)と現代ギリシャ語の各々に

において、空間詞は統語的特徴に基づき二グループに分けられる。それぞれのグループの名称は研究者の立場により様々であるが、本稿ではそれぞれを簡単に「前置詞」「副詞」と呼ぶことにする⁴⁾。

古代ギリシャ語の前置詞と副詞の認定の基準はおおよそ次のようになる⁵⁾。

	前置詞	副詞
統語特徴	(α) 単独で生起しない (β) (代) 名詞句と共起する場合、 対格・与格・属格形と共起 ⁶⁾	(α) 単独で生起可能 (β) (代) 名詞句と共起する場合、 属格形と共起 対格・与格形と共起しない ⁷⁾
例	ἀπό～から, ἐκ～の中から, ἐν～で, εἰς～へ, ἐπί～の上, ὑπέρ～の上 ὑπό～の下	ἐπάνω 上, ὑπεράνω 上, ὑποκάτω 下 ἔμπροσθεν 前, ὀπίσω 後, ἐντός 中 ἔνδον 中, ἔξω 外

他方、現代ギリシャ語（標準語）の前置詞と副詞を区分する特徴は次の通り。

	前置詞	副詞
統語特徴	(α) 単独で生起しない (β) (代) 名詞句と共起する場合、 対格形と共起 属格形と共起しない ⁸⁾ (γ) 前置詞句と共起しない	(α) 単独で生起可能 (β) (代) 名詞句と共起する場合、 属格形と共起 ⁹⁾ 対格形と共起しない (γ) 前置詞句と共起可能
例	σε ～に/で, ἀπό ～から	πάνω 上, κάτω 下, μπροστά 前, πίσω 後, μέσα 中, ἔξω 外

古代語・現代語いずれの場合も、副詞／前置詞の認定の決め手は単独で生起するか否か(α)である。この点は一般言語学的な観点からも首肯されるであろう。これに加えて、ギリシャ語に独自な特徴として、副詞も場合によっては名詞・代名詞と共起することが可能であり、その場合の名詞・代名詞は属格形になる(β)。さらに現代語の特徴として、副詞は前置詞句と共起して(γ)、より複雑な統語構造を形成し得る(いわゆる複合前置詞)。

1.2. 中世民衆ギリシャ語の空間詞カテゴリー

さてそこで、中世民衆語の空間詞が上記基準に関してどのように振る舞うのかを見てみよう。民衆語作品の中でも特に問題の空間表現が見いだされるのが「後期ビザンツ版アレクサンドロス物語」である。この作品中にみられる空間詞のうち、「上方」「下方」「前方」の空間概念を示す空間詞には、対格名詞と共起するものが多い（詳細についてはTachibana(1994:48-50)）。品詞認定の基準(β)に照らすとこれらは前置詞と解釈される。しかしながら、同じ空間詞は（たとえ奪格・部分格の機能でなくとも¹⁰⁾）属格名詞とも共起することが多い。この場合、空間詞は副詞となる。すなわち、これらの空間詞は二つのカテゴリーにどちらも帰属する特徴を併せ持っていると考えられる。

次に、他の二つの基準に関してはどうかであろうか。基準(α)の点では、ほとんどの空間詞が単独で生起し得る¹¹⁾。また、基準(γ)に関しても前置詞句と共起するものがほとんどである。つまり、基準(α)(γ)に照らすと、これらの空間詞は副詞と認定される（次表参照）。

基準	(α)	(β)	(γ)
「上方」			
ἀπάνωθεν		+ACC	
ἀπανώθειον	+ \emptyset	+ACC/GEN	+εἰς
ἐπάνωθεν		+ACC	
καταπάνω		+ACC/GEN	+εἰς
「下方」			
ἀποκάτω	+ \emptyset	+ACC/GEN	+εἰς
υποκάτω		+ACC/GEN	
「前方」			
ε-/ομπρός	+ \emptyset	+ACC/GEN	+εἰς
ἐ-/όμπροσθεν	+ \emptyset	+ACC/GEN	+εἰς
κατέμπροσθεν		+ACC/GEN	
品詞認定	副詞	前置詞／副詞	副詞

【+ \emptyset :共起項なし（単独で生起）、+ACC:対格（代）名詞と共起、
+GEN:属格（代）名詞と共起、+εἰς:前置詞(εἰς)句と共起】

以上の観察は次のようにまとめられよう。空間詞の内の幾つかが副詞から前置詞への品詞カテゴリー転換の途上にある。対格名詞支配はそのことを示している。しかし、他の統語的特徴（単独生起の可能性、前置詞句と共起の可能性）の点では、これらは明らかに副

詞に属すると考えられる。

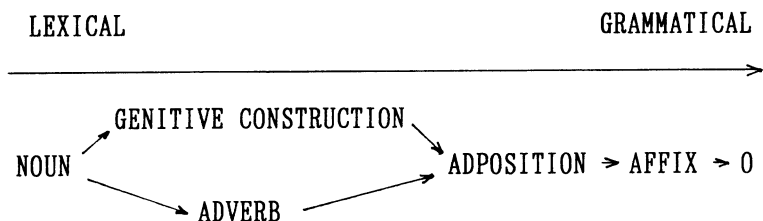
2. 一般言語学的考察

2.1. 文法化(grammaticalization)

次に本稿における二つ目の問題の考察に移る。前節で観察された空間詞のカテゴリー転換の兆候は、一般言語学的にどのように解釈されるのだろうか。

Svorou(1994)は空間詞の形態統語論的な発展にその一章を当て、多くの言語の観察から導き出された空間詞カテゴリーの変化の方向性を下のような図で示している。

The continuum of morphosyntactic evolution of spatial grams
(Svorou, 1994:101)



本稿で考察された、対格名詞と共起する中世民衆ギリシャ語の空間詞は、この図で言えば、ADVERB→ADPOSITION（前置詞・後置詞をともに含む）の途上にあると言えよう。Svorouはこの発展の方向性を空間詞の自立性の弱まりと解釈する¹²⁾。名詞のように語彙カテゴリーに属する形態の自立性が弱まって、文法的機能の担い手になっていくというのであるから、この変化は畢竟、文法化(grammaticalization)の一例であると考えられる¹³⁾。

ところで、古代語においても、ホメロスのギリシャ語から古典期ギリシャ語にかけて類似の変化が生じている。すなわち、本稿で前置詞に分類したἀπό, ἐκといった語群は、より古い段階では単独生起が可能であり、したがって、副詞的特徴を濃厚に帯びていた。その後、この語群は次第に自立性を失い、自立性のより強い名詞や動詞に支えられてのみ生起するようになる。かくして前置詞と動詞接頭辞が誕生する¹⁴⁾。

さて、中世民衆語でも同じ変化、すなわち空間詞の文法化が繰り返されたと考えて良いのだろうか。この間に答えるためには、文法化というものを二つの側面から考えてみる必要がある。文法化は(α)機能面（語彙的→文法的）と(β)形態面（自立語→付属語）の両面において進行していく¹⁵⁾。中世民衆語のパタンの場合を考えてみよう。まず、(α)機能面ではより文法的になったとは言い難い。例えば属格と共起する場合よりも対格と共起する場合の方が、空間的意味よりもメタフォリックな用法が多い、というようなことは例証できない。もっともこれに対しては、全過程の両端にある名詞と接辞とを較べた場合両者の機能的違いは顕著かも知れないが、その中間過程である副詞と前置詞の間にはそれほどの

違いが認められずとも不思議ではない、といったような反論があるかも知れない。しかしながら、中世民衆語の空間詞に関して、文法化であると解釈するのがより困難な根拠は(β)形態面にある。確かに統語的には、空間詞のあるものが属格形から対格形と共起するようになってきているのだから、自立性が弱まっているようにも思える。しかし、それら空間詞の形態面に着目すると、無条件に付属語への移行を受け入れることは出来ないように思われる。というのは、空間詞の内、接辞をもつもの(例えば *απανώθειον, αποκάτω*)の方が対格名詞を取ることが多く、逆に、接辞を取らない(*άνω, κάτω*)、あるいはただひとつの接辞しか持たない(*απάνω*)形態は対格形と共起することが極めて少ないのである¹⁶²。対格形と共起し副詞と認定される形態の方が、より多くの接辞を備えている以上、その形態における自立性の弱化を考えることは困難なのではないだろうか。

このように、中世ギリシャ語の空間詞+対格名詞パターンが文法化の明瞭な例であると考えることには問題があり、その特異性は空間詞自身ではなく、むしろ名詞の側(すなわち属格形と対格形の競合)にあると考えた方が良さそうである。そこで次節では、空間詞と共起する名詞を格の観点から考察する。

2.2. 格推移(case-shifting)

空間詞と共起する場合のみならず、その用法の全般において、ギリシャ語の対格形はその使用領域を通時的に広げてきた。この点については従来より指摘されている。例えば、古代語で属格・与格形を支配していた動詞や前置詞の多くが中世以降、対格形を支配するようになる(Hatzidakis, 1892:220-226, *Ανδριώτης*, 1953)。これらの現象において、名詞と共起する動詞・前置詞の形態上の自立性が弱まったとはもちろん考えられない。共起相手には直接関係なく、対格形が他の格形を押し退けて拡張していったとすべきだろう。

類似の現象は他の言語でも観察されるが、一般言語学的には次のように解釈されると思われる。Blake(1994:157)には(屈折)格の階層が掲げられている。

Inflectional case hierarchy(Blake, 1994:157)

nom acc/erg gen dat loc abl/inst others

この階層は、様々な言語の格体系を対照して抽出したものであるが、共時的・通時的な現象の解釈に役立つ。共時面からは、ある言語が複数の屈折格を持つ場合、階層の上位(図の左)の格ほど具備され易い、と予想される。通時面では、格体系が推移してその内のあるものが消失する場合、階層の下位にあるものほど消えやすく、上位のものほど後々まで存続する、との予測が成り立つ。(例えば、階層の第四位にある与格は古代ギリシャ語の格のうち、もっとも早く消失した。)本稿のテーマとの関連で注目すべきは、対格が属格の上位にあることである。すなわち、属格の方が先にその存在価値を弱め、対格(や他の

形態) に取って代わられるのは、類型論的にも自然な傾向である、と言える。

中世ギリシャ語の空間詞+対格形パターンも、他の対格形の意味領域拡大の場合同様、格の階層の上位にある対格が、下位の属格に取って代わろうとする過程を示す例として理解することが可能である。

3. 結論

中世民衆ギリシャ語の空間詞の一部には副詞から前置詞への品詞転換が観察される。この転換は、しかしながら、対格名詞と共起するという点においてのみ認められるものであり、他の副詞的特徴(単独生起の可能性、前置詞句との非共起性)は変化を示していないし、属格名詞と共起する例も観察される。したがって、問題の空間詞は全体として副詞的特徴を多く保持していると考えべきである。そして、この品詞転換は、空間詞自身の文法化と考えるよりも、名詞の格推移が原因である、と見る方が適切であるように思われる。

注

*)本稿は平成七年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

1)「後期ビザンツ版アレクサンドロス物語散文」K写本。テキストはΜητσάκης(1968)。

2)例えば、エウリピデス「アルケステイス」463 κούφα σοι χθών ἐπάνωθε πέσοι。

3)この用語はSvorou(1994:31)から借用した。

4)例えばSchwyzer(1950:436ff.,533ff.)はそれぞれを「真の或いは本来の前置詞(echte oder eigentliche Präpositionen)」と「真ならざる或いは非本来の前置詞(unechte oder uneigentliche Präpositionen)」と呼び、Humbert(1982:300ff.,323ff.)も同様の名称を使う(les prépositions proprement dites, les prépositions improprement dites)。また、通時的には「前置詞」の方が古いためにSchwyzerは「より古層の前置詞(Die ältere Schicht der Präpositionen)」「より新層の前置詞(Die jüngere Schicht der Präpositionen)」とも呼んでいる。辞書では単純に「前置詞」「副詞」とし、後者の下位区分に属格支配の例を挙げることが多いようである(Liddell-Scottの古代語辞書、Κριταράςの中世語辞書など)。

現代語文法では「前置詞」「副詞」と呼ぶことが多い(Mirambel(1983),Tzermias(1969),Mackridge(1985))。しかし,Householder et al.(1964)は「前置詞(prepositions)」と「前置詞的副詞(prepositional adverbs)」としている。

5)Schwyzer(1950:533)に従えば、「より新層の前置詞(=本稿の「副詞」)」が「より古層の前置詞(=本稿の「前置詞」)」から区別されるのは次の点である。「より新層の前置詞」は、

- (1)動詞の接頭辞にはならない
- (2)ただ一つの格形とのみ共起
- (3) (具格・位格ではない) 狭義の与格とも共起可能
- (4)複合名詞の構成要素として現れるのは極めて稀

Schwyzlerの「より新層の前置詞」には空間以外の概念を表す形態も含まれている。したがって、本稿のテーマである空間詞に限定した場合、(3)は関係せず、(4)の格形も、表に示す通り、属格形に限られる。また、本稿の考察は、空間詞と(代)名詞との共起関係に限定するので、(1)(4)は扱わない。

- 6)但し、前置詞と属格の共起はおおむね以下の場合に限られる。A)前置詞自身が奪格・部分格的機能を持つ場合(ἀπό, ἐκ)。B)前置詞句全体が、奪格・部分格的機能を持つ場合。
- 7)空間概念を示す副詞の場合。注5)参照。
- 8)古代語伝来の古風な前置詞の中には属格形を取るものがあるが、空間表現には直接関係しない。
- 9)特に接辞代名詞の属格形。名詞の場合は前置詞を介して副詞と結合する場合が多い(すなわち(γ)のパタン)。
- 10)注6)参照。
- 11)「後期ビザンツ版アレクサンドロス物語」F版において、ἀπανάθειονは単独生起の例がなく、共起する名詞はすべて属格形である(cf. Tachibana, 1994:49)ので、他の空間詞以上に前置詞への移行が進んでいると考えられる。
- 12)場所名詞→前(後)置詞→接辞という変化の指摘はHopper, 1991等にも見られる。
- 13)「文法化」を最初に論じたMeillet(1912:131)では、「自立的な語の、文法的担い手への役割の移行」と説明されている。その際彼が考えているのは、例えばロマンス語や現代ギリシア語の分析的完了形や未来形、英語の現在進行形などである。
- 14)Cf. Schwyzler(1950:419ff.).
- 15)例えばMeillet(1912:139)「付属語の意味上の弱まりと形態上の弱まりとは合い携えて進行する」。
- 16)Cf. Tachibana(1994:48)

引用文献

- Ανδριώτης, Ν.Π. (1953) Η χρήση αμεταβάτων ρημάτων ως μεταβατικών στη μεσαιωνική και νέα ελληνική. Προσφορά εις Στίλπωνα Π. Κυριακίδη. σσ. 49-62.
- Blake, J. B. (1994) *Case*. Cambridge UP.
- Hatzidakis, G. N. (1892) *Einleitung in die neugriechische Grammatik*. Leipzig.

- Hopper, P.J. (1991) On Some Principles of Grammaticization. In *Approaches to grammaticalization*, vol.1. Traugott, E.C. & Heine, B. (eds.) pp.17-35
 Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Householder, F.W., Kazazis, K. & Koutsoudas, A. (1964) *Reference Grammar of Literary Dhimotiki*. Bloomington: Indiana Univ.
- Humbert, J. (1982³) *Syntax grecque*. Paris: Klincksieck.
- Mackridge, P. (1985) *The Modern Greek Language*. Oxford UP.
- Meillet, A. (1912/1948) L'évolution des formes grammaticales. In *Linguistique historique et linguistique générale*. pp.130-148. Paris: Champion.
- Mirambel, A. (1983) *Grammaire du grec moderne*. Paris: Klincksieck.
- Μητσάκης, Κ. (1968) Διήγησις περί του Αλεξάνδρου και των μεγάλων πολέμων. *Byzantinisch-Neugriechische Jahrbücher* 20, pp.228-301 (= *Το εμπυχούν ύδωρ* (1983) pp.299-383).
- Schwyzler, E. (1950) *Griechische Grammatik*, 2. München: C.H. Beck.
- Svorou, S. (1994) *The Grammar of Space*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Tachibana, T. (1994) "Syntactic Structure of Spatial Expressions in the 'Late-Byzantine Prose Alexander Romance'" 『プロピレア』 6, pp.35-51.
- 橘 孝司 (1995) 「《後期ビザンツ版アレクサンドロス物語》における空間表現」 『吉川守先生御退官記念言語学論文集』 溪水社、pp.194-208.
- Tzermias, P. (1969) *Neugriechische Grammatik*. Bern/Munich: Francke